

短 報

一般教養科目「体育Ⅱ（野外活動実習）」における チャレンジプログラムの意義とその効果について

菊田 文夫¹⁾

Significance and Efficacy of a Challenge Program in the Course Physical Education II (Outdoor Activity in Practice)

Fumio KIKUTA, Ph.D¹⁾

[Abstract]

The aim of this study was to verify the efficacy of the course Physical Education II (Outdoor Activity in Practice) conducted at a school of nursing. The data analyzed were free responses written on retrospection sheets submitted by 32 participants on the last day of the course. From the responses, sentences judged to support the efficacy of the course were extracted and organized according to two aspects: what realizations were obtained through adventure experiences and lifestyle experiences, and how the experiences from the course would be utilized in future daily life. Extracted realizations included "I deepened my relationships with my friends," "I felt confidence and a sense of accomplishment from having made it through myself," "I discovered the value of a lifestyle that does not rely on electronic devices like cellular phones," and "I understood the importance of cooperating with everyone." Furthermore, extracted responses aimed toward future daily life included "I would like to keep challenging myself without giving up," "I would like to eat meals with a feeling of gratitude," and "I would like to endeavor to be compassionate and considerate of the people around me."

[Key words] challenge program, adventure experience, lifestyle experience, experiential learning, course efficacy

[要 旨]

本研究の目的は、看護学部で開講している体育Ⅱ（野外活動実習）の授業効果について検証することにある。

本研究では、実習の最終日に32名の参加者が提出したふり返しシートに記入されている自由記述を資料として用いた。これらの中から、生活体験や冒険体験を通して得た気づきはどのようなものであったのか、この授業で体験したことを、今後の日常生活にどのように活かしていこうと考えているのか、という2つの視点から、授業の効果を裏付けると考えられる文章を抽出して整理した。

その結果、「友人との関係が深まった」「自分でやり遂げた達成感と自信を味わえた」「携帯電話などの電子機器に頼らない生活に価値を見いだせた」「みんなと協力する大切さがわかった」などの気づきが見られた。さらに、今後の日常生活に向けて、「あきらめずにチャレンジしていきたい」「感謝の気持ちを持って食事をしたい」「まわりの人びとへの配慮や思いやりを心がけたい」という回答が得られている。

[キーワード] チャレンジプログラム, 冒険体験, 生活体験, 体験学習, 授業の効果

1) 聖路加国際大学 基盤領域 St. Luke's International University, Social Sciences & Humanities / Fundamentals of Research

I. はじめに

聖路加看護大学（以下、本学）において看護学部の学生を対象に毎年度開講している体育Ⅱ（野外活動実習）では、自然豊かな環境のもとで、大学生同士が生活体験を共有しながら、冒険体験を促す課題に自分の意思で挑戦する機会を設けている。この実習の背景には、上西ら¹⁾も、男女ともに児童期から自然体験に乏しいこと、特に女子は、冒険やスリルを伴う体験が少ないと述べているように、生活環境の都市化や、学校教育における過剰な安全管理によって、青少年が自然を体験する機会や冒険に挑戦する機会が少ないという現状がある。さらに、上西ら¹⁾は、女子児童が冒険やスリルを初めて体験することによって、その快さ・楽しさを感じ、それが新鮮な感動的な体験となったと考察している。また、野田²⁾は、冒険教育において、熟達することや成功することは重要な意味を持つと述べたうえで、成功体験が自分自身に対する自己効力感を築くと述べた Marcia の文献³⁾を紹介している。一方、飯田⁴⁾は、自然と関わることによって、成功体験、社会性、自然に対する感性が育てられると述べており、これらの先行研究をみても、大学生に対して、自然豊かな環境のもとで冒険にチャレンジする、チャレンジプログラムを提供する意義は大きいと考えられる。

これまでに、この実習では、自然体験と冒険体験を通して、自然の恵みに感謝する気持ちを育むとともに、課題に挑戦してそれを達成できたという成功体験を通して自己効力感を高めるきっかけづくりを目指してきた。さらに、仲間のために自分をどのように活かすことができるのか、について考え、それを積極的に実践する、チームワークの基礎となる姿勢を育む機会を提供する、チャレンジプログラムを企画、実践し、その改良を重ねてきた。

本研究では、開始から12年目を迎えた体育Ⅱ（野外活動実習）の効果について、受講者の「ふり返しシート」に基づいて検討したい。

II. 研究目的

本研究では、2013年度の体育Ⅱ（野外活動実習）を受講した学生の「ふり返しシート」の自由記述に基づいて、次に述べる2つの視点から、授業効果について検証することを目的とする。

A. 受講者同士が生活を共にする体験や、自然体験、冒険体験を通して得た自分自身への気づきはどのようなものであったか。

B. この実習で体験したことを、自らの日常生活にどのように活かしていきたいと考えているのか。

III. 研究方法

1. 実習の概要

体育Ⅱ（野外活動実習）は、本学の看護学部1, 2, 4年生対象の選択科目として、9月中旬に、山梨県北杜市の（公財）キープ協会キープ自然学校に宿泊する3泊4日の集中講義として実施されているものである。この実習では、「『野外活動』を通して、生涯スポーツの意義と大切さに気づくこと」「『いのちの大切さ』『いのちをいただくこと』について、体験を通して感じること」「自然豊かな環境の中で、チャレンジプログラム等のグループワークに積極的に参加し、人と人とのつながり（対人関係）について、体験を通して考え、自らの成長の糧を得ること」「グループワークの過程で、能動的な情報獲得の姿勢やリスクマネジメントについて、体験を通して学ぶこと」を目標としている。2013年度は、資料1に示す内容に基づいて、事前のワークショップを6月7日に、第1期を9月16日から19日、第2期を9月19日から22日の日程で、それぞれ実施した。

資料1に下線で示した、この実習に含まれるチャレンジプログラムにおいては、受講者同士が生活を共にする体験や、酪農体験、冒険体験の過程で挑戦する、次の4つの目標を設定している。

- 1) 携帯電話など、文明の利器のない宿泊生活を送ること。
- 2) 決められた時間に責任を持って牛飼いの仕事を担当すること。
- 3) グループで雨天でも決行する飯盛山トレッキング（登頂）に挑戦すること。
- 4) グループでキャンプファイヤーのスタンツ（出しもの）を考えて演じること。

さらに、事前ワークショップにおいて、次の7点について、受講者と口頭で約束を交わしている。

- 1) 文明の利器から離れた生活に挑戦してみよう。
- 2) 情報は、能動的姿勢で獲得しよう。
- 3) 自分や仲間の個性を尊重しよう。
- 4) チャレンジプログラムには、自らの意思で、自分なりに挑戦してみよう。
- 5) 多数決ではない合意形成の方法を試してみよう。
- 6) 失敗（うまくいかなかったこと）を前向きにとらえていこう。
- 7) 生活にけじめをつけよう。

なお、この実習を運営するにあたっては、著者を含む教員2名と（公財）キープ協会のレンジャー（自然体験活動指導者）や農場スタッフのほか、キャンプの運営経験が豊富な、本学卒業生3名と本学4年生5名の協力を得ている。

資料1 2013年度 体育Ⅱ（野外活動実習）の概要

事前ワークショップ 6月7日	以下の目標をもって、現地での共同生活・酪農体験・冒険プログラムに関するグループミーティングを行う。 ・自分に必要な正しい情報を能動的姿勢で獲得する。 ・自分や仲間の個性を尊重する。 ・活動内容から起こりうるリスクなどを想定し、そのための準備や対策、携行品について考える。				
		第1日	第2日	第3日	第4日
第1期 9月16日～19日 第2期 9月19日～22日	午前	集合 現地に移動	酪農体験② 放牧 酪農体験③ 牛舎清掃・集牧・搾乳	冒険プログラム② 飯盛山トレッキング(登頂) キープ自然学校と 飯盛山山頂を徒歩で 往復	ふり返り ふり返しシートへの記入 <u>分かちあいの会</u> 閉講式 電子機器類の返却
	午後	開講式 <u>電子機器類の一時預かり</u> アイスブレイキング <u>酪農体験①</u> 事前学習	酪農体験④ バターづくり <u>冒険プログラム①</u> 飯盛山トレッキング(登頂) 事前グループミーティング リスクマネジメント 個人装備の確認 グループ装備を受領 選択装備の意思決定	<u>キャンプファイヤーの</u> <u>事前グループミーティング</u>	現地から移動 解散
	夕食後	夜のフィールド散策 ナイトハイキング 絵本の読み聞かせ	おやすみの前に 絵本の読み聞かせ	<u>キャンプファイヤー</u> 夜のまったりプログラム	

下線は、チャレンジプログラムとして位置づけているアクティビティを示す。

2. 研究対象

本研究の対象者は、2013年度に体育Ⅱ（野外活動実習）を履修した看護学部1年の学生で、第1期と第2期の参加者を合わせた62名（男性1名、女性61名）の受講者のうち、研究参加への同意を得た32名である。

3. 研究資料

本研究で用いた資料は、受講者が実習最終日に記入した「ふり返しシート」である。ふり返しシートでは、学生番号と氏名のほか、「(1) この実習で体験した活動を具体的にふり返って（良かったこと、自分をほめてあげたいこと、こうすればもっと良くなったと思うこと、など）」、「(2) 自然学校での共同生活をふり返って」「(3) この実習で体験したことを、自分の日常生活（生きかた）に、今後、どのように活かしていきたいと思いませんか」「(4) その他（コメントがあれば記入してください）」という質問に対する答えを自由記述形式で求めた。なお、受講者のプライバシー保護の観点から、学生番号と氏名の情報について、研究者が知り得ないように配慮を行うとともに、今回は男性の受講者が1名であったため、性別については回答を求めている。

4. 分析方法

研究資料で述べた、「ふり返しシート」の(1)から(4)までの問いに対して回答された自由記述の内容を併せて、「Ⅱ. 研究目的」で述べたAおよびBの視点から重要と思われる回答をそれぞれ抽出した。さらに、AとBの視点、それぞれについて、類似した回答をまとめてカ

テゴリー化したうえで、各々のカテゴリーに含まれる回答者数を集計し、回答率を計算した。なお、A、Bの視点ともに、ひとりの受講者から、複数の回答を得ている場合がある。なお、各々のカテゴリーの回答率は、対象者32名に占める割合として計算した。

5. 倫理的配慮

本研究への協力を拒否することによって、すでに成績が確定している体育Ⅱ（野外活動実習）を含む、他の教科目の評価等に何ら不利益が生じないことを事前に説明している。さらに本研究では、個人を特定できる、学生番号と氏名が削除されている「ふり返しシート」の写しを、受講者自らが、研究者の目にふれない環境のもとで提出することによって、本研究への協力に同意したものと見なしている。なお、本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得ている。
(承認番号14-015)。

Ⅳ. 研究結果

本研究の対象者32名から得たAとB、それぞれの視点について集計した回答総数は、Aが121、Bが72であった。対象者一人あたりの平均回答数は、Aについては3.8、Bについては2.3になる。

1. 生活を共にする体験、自然体験、冒険体験を通して得た自分自身への気づきについて
対象者32名から得た回答について集計した結果を表

1に示す。これによると、「いつもは話さない違う学年、年齢の方と話す機会になってとても良かった」「入学してから、まだ一度も話したことがなかった人とたくさん話すことができたり、仲が良い友だちとは、より友情を深めることができたと思う」という回答がみられるように、これまで時間をかけて話す機会に乏しかったクラスメイトや異なる世代の人々とも交流することができ、「新たに友人について知ることができるなど、友人との関係が深まった」者が26名(81.3%)と最も多かった。さらに、冒険プログラムに挑戦することによって「自分でやり遂げたという達成感や自信を味わえた」者と、実習中に携帯電話やiPodなどの電子機器を一切使用しない生活に挑戦して「電子機器に頼らない生活に価値を見出すことができた」者が、ともに18名(56.3%)、受講者と生活を共にする体験や酪農体験、あるいは冒険プログラムに挑戦して「皆と協力することの大切さがわかった」者が14名(43.8%)、現地で地産地消の食事や酪農を体験することによって「いのちをいただく食事の大切さと感謝の気持ちを感じた」者が12名(37.5%)みられた。また、事前ワークショップや冒険プログラム①のグループミーティングで目的とした「リスクマネジメントの重要性がわかった」者と、酪農体験や冒険プログラムにおいて「達成感や感動を共有することができた」者が、ともに10名(31.3%)みられている。

2. この実習での体験を、自らの日常生活に活かしていきたいと考えていることについて

対象者32名から得た回答について集計した結果を表2に示す。これによると、「チャレンジしていきたい」と考えている者が15名(46.9%)と最も多く、次いで「感謝の気持ちをもって食事をしたい」「まわりの人びとへの配慮、思いやりを心がけたい」と考えている者がともに8名(25.0%)、「時間を大切に過ごしたい」「人とのかわりを大切にしたい」と考えている者がともに6名(18.8%)みられた。また、「自分から主体的に考えたり、行動したい」と考えている者も5名(15.6%)みられる。

V. 考察

今回の受講者が得た自分自身への気づきについて、最も多くみられたものは、「新たに友人について知ることができるなど、友人との関係が深まった」であった。この理由としては、大学とは異なる環境のもとで、3泊4日の共同生活とチャレンジプログラムへの主体的な参加によって、普段から親交の深い友人以外との交流が、自然に、そして積極的に行われたことが示唆される。また、大学のキャンプ授業に参加した学生の自己概念と孤独感の変化について報告している影山ら⁵⁾の研究では、キャ

ンプの授業によって孤独感の高い女子学生に自己概念の向上が認められており、共同生活でこれまであまり親交のなかった友人との関係が深まることによって、特に、日ごろから孤独感の高い受講者については、この授業に参加することによって、自己概念の向上が期待できると考えられる。

さらに、チャレンジプログラム、特に飯盛山登頂を目指した冒険プログラムで、「自分でやり遂げたという達成感や自信を味わえた」ことによって、受講者の自己効力感を高めることができたのではないかと考えられる。なぜならば、基礎看護技術演習時の自己効力感に関する遠藤らの研究⁶⁾においても、自己効力感を高めるには、遂行行動の達成感を学生自身が認識し、肯定的な感情をもつことが重要であり、さらに教員による客観的評価より学生本人の主観的評価の方が重要であることが示唆されているからである。また、吉田⁷⁾は、女子短大生が、キャンプにおける様々な課題に対して挑戦し、成功体験をすることによって、自分はこれでいいのだと捉えられるように、自尊感情が有意に向上したと報告している。そこで、この実習において得ることができた達成感によって、受講者の自尊感情が高められたのではないかと推察する。

現在、私たちの日常生活に不可欠な存在となっている携帯電話や音楽プレーヤー、パソコンなどの電子機器を一切利用できない環境のもとで生活する体験に初めて挑戦することによって、「電子機器に頼らない生活に価値を見出すことができた」受講者も半数以上みられている。受講者からの回答をみると、この体験が、今後の日常生活において、携帯電話の使用を減らして家族や友人との会話に時間を充てるなど、もっと時間を効率よく使う工夫をしていきたいという、新たな気づきを与える貴重な機会になっていると考えられる。

一方、この実習で得た体験を、今後の日常生活に活かしていきたいと考えていることについては、「チャレンジしていきたい」が、半数近くの受講者から得られている。近藤⁸⁾が述べているように、挑戦が少なからず成功をもたらすと、それが新たな圧力を生み、その結果、さらなる挑戦が行われるという、好ましい循環が生じる場合もある。挑戦を重ねることによって獲得した成功体験の蓄積が、自己効力感を増進させるという効果も期待できるのである。さらに、「感謝の気持ちを持って食事をしたい」と「まわりの人々への配慮、思いやりを心がけたい」が同数みられ、現地で提供された地産地消の食事、酪農体験や冒険プログラムを通して、自分のいのちは他者のいのちに生かされていることに気づき、自分を支えてくれるすべてのいのちを思いやり、感謝する気持ちが醸成されていると考えられる。

経済産業省⁹⁾が提起する社会人基礎力のうち、大学生

表1 生活を共にする体験、自然体験、冒険体験を通して得た自分自身への気づき (回答者数32名)

カテゴリ	具体的な回答の例	回答者数 (回答率%)
新たに友人について知ることができるなど、友人との関係が深まった	普段一緒に行動しない子たちの素の部分や良いところをたくさん発見することができて嬉しかった いつもは話さない違う学年、年齢の方と話す機会になっても良かった 今までの学校生活では見られないような一面などを見ることができて新鮮だった 入学してから、まだ一度も話したことがなかった人とたくさん話することができたと思う	26 (81.3)
自分でやり遂げたという達成感や自信を味わえた	達成感を大きく味わうことができた/自分がやり遂げたことに感動した/途中であきらめらなくなった自分すごいと思った 分かって、いつももつとががんばられるんじゃないの、と普段感じないことを感じることもできた 体験活動を通して、頑張ればほとんどのことができたと思った	18 (56.3)
電子機器に頼らない生活に価値を見いだすことができた	携帯がないことで学校では普段あまり話さない友だちとも話す機会ができた 皆で目を見合っただけで深い話をしたり、星を見ながら話したりと、心の底から思っていることを言いあえて、皆との仲がよくなりました 携帯の画面を見ないで、他の景色を見ている方が、新しい発見や世界があり、もっと多くの新しいものに触れ合うチャンスがあるのだと実感しました これから生活していく上で、そのとき今自分がしている一つのことを集中して全力で取りこむことの大切さを学べた	18 (56.3)
皆と協力することの大切さがわかった	共同生活において協力することの大切さを学べた/皆で協力しあって生活できたのでとても楽しかった 自分ひとりでは困難なことでも、皆と協力すれば乗り越えられるということを実感した お互いを助け合うことによって一人ではできなかったものや見えなかったものを見ることができた	14 (43.8)
いのちをいただく食事の大切さと感謝の気持ちを感じた	食べ物に関する感謝の気持ちでいっぱいになった 改めて私たちの生活は牛などの動物や自然などに支えられて栄養をもらって生きているのだなと実感できた	12 (37.5)
リスクマネジメントの重要性がわかった	リスクマネジメントを行うって、危険を回避するためにいろいろなる場面を考えることを学んだ 将来何が起きるかを想像する力の必要性を感じた/自分なりにリスクマネジメントをして、必要な持ち物を準備できた 事前に必要な情報について考え、収集しておくべきだった	10 (31.3)
達成感や感動を共有することができた	皆で協力して達成する喜びを知った価値はとて大きいと思った/仲間と感動を分かちあえた 思いを共有し合うことによって、感動が倍になったり、自分の考えを深めたりすることができた 体験活動は疲れも感じなければ、終わったあとの達成感や楽しかったと思う気持ちも強く、その思いをすぐに仲間と共有することができる環境はありがたかった	10 (31.3)
他者からの気づかひに感謝し、他者への気づかひが大切だと感じた	周囲の友人たちから気づかひももらうことがとて多かった/卒業生スタッフのさりげない気づかひや支えのおかげだった 登山しているとき、何度も辛い場面があったが、友人の何気ない優しい言葉に救われた 他者に気がつかえれば、もっと達成感のあふれるチャレンジプログラムになったと思う	9 (28.1)
皆の納得できる決めかたができた	皆の話を聞いたうえで自分の考えを言うことで、皆が納得する選択肢に決まった/皆で意思決定することが大事なんだと改めて気づかされた 自分たちの選択(選択肢・体調が思わしくない仲間とともに登山すること)に、皆が誇りをもって行動できた 討論を経て決まった選択肢には各自が誇りを持って、後悔が少ないということを実感できた/人それぞれの意見を否定することなく受容 決して多数決という決めかたが正解ではないと感じた/自分の意志を自分でちゃんと伝えるということとはとても良いことだということがわかった	9 (28.1)
楽しむことができた	楽しむことができた/義務感で作業を行うのではなく、本当に楽しいと思いがながら活動を行えたので良かった	6 (18.8)
積極的に取り組むことが大切だと思った	自分の意思を積極的に伝えることができるようになった もう少し積極性を身につけていければ、もっと多くのことを体験し学ぶことができていたと思う 自分自身が積極的に話しかけた行動を起こせば、もっと様々な人間関係をつくれたと思う	5 (15.6)
挑戦することの大切さに気づいた	牛飼いや山登りでは新たな発見やチャレンジすることの大切さを知ることができた 弱音をあまり吐かずに困難を乗り越えることの重要さを知ることができた 苦手なことを選んでいくのではなく、勇気をもってチャレンジしてみることが、とても大きな価値であることに改めて気づいた 自分の力の限界を今まで低くみていたことに気がつき、日常生活で「自分にはこれではいけない」と行う前からあきらめてしまっていたことだのだからと思った	4 (12.5)

表2 この実習での体験を、自らの日常生活に活かしていきたいと考えていること（回答者数32名）

カテゴリー	具体的な回答の例	回答者数 (回答率%)
チャレンジしていきたい	<p>初めて挑戦することでも恐れずにチャレンジしていきたい これからは興味あることや自分のためになりそうなことには機会があればどんどん積極的に挑んで自分の経験を増やしたい できないと思っていることをそのままにあきらめないようにしたい きついことや辛いことがあっても最後まであきらめない これから先、自分には無理だと思ふような高い壁にぶち当たったときにこの体験を思い出し、チャレンジしてみること、限界までがんばること、ときに仲間を頼ることを忘れない 次は食欲に何ごとにもチャレンジしたい</p>	15 (46.9)
感謝の気持ちを持って食事をした	<p>常に食事をする時に食べられることや自然のいのちによって自分が生かされていることに感謝しながら食べたいと思う 食べものに対する感謝の気持ちと、残さずに食べるということを徹底したいと思った ありがたみを感じながら食事をしたと思う</p>	8 (25.0)
まわりの人々への配慮、思いやりを心がけたい	<p>「他の人は何を思っているのだろう」ということを常に考えて、他の人を思いやる気持ちを忘れずにいきたい 相手の様子を見て、相手の気持ちを判断できるようにしたい 相手に常に気をつかうことを心がけたい 他の人を信じて協力すること、思いやることを忘れない</p>	8 (25.0)
時間を大切に過ごしたい	<p>携帯を使用する時間を短くすれば、家族との会話も増えるだろうし、もっと時間を効率よく使うことができると思う 時間を大切に、そして時間を守るようにしたい ヒマさえあればいじくっていた携帯の利用を減らそうと思う 仲間やものを大切に、自分にとって有効な時間の使いかたを見直していけたらと思う 家族と話す時間も増やしてみようかなと思う</p>	6 (18.8)
人どのかかわりを大切にしたい	<p>人どのかかわりも大事にしたいと強く感じ、人生は一期一会だから、その一つ一つを大事にしたい もっと多くの人たちと接してみたいと思うようになった 「ありがとう」という言葉を、より大切にしていきたい</p>	6 (18.8)
自分から主体的に考えたり、行動したい	<p>これからの授業や実習などでも、自分で（情報を）把握することを忘れない 今後も自分の意見をしっかりと持ち、その根拠となる部分まで掘り下げて深く考えていこうと思った グループやチームで何か活動する際には、自分から情報を開示し、相手の情報を得るようにしたい</p>	5 (15.6)
協力や助け合いの気持ちを忘れたい	<p>日常生活でも助け合って困難を乗り越えたいと思った 大学でもこのような（やりたい）と思ったことができるように）雰囲気を作り続けていきたいし、自分もそのような雰囲気づくりに参加したい</p>	3 (9.4)
臨機応変に行動できるようにになりたい	<p>自分で何かをする際にも、状況によってどういふ対応をしなければいけないのかを考えていきたい いざという時に臨機応変に行動できるように日々努力し、生きていきたい</p>	3 (9.4)
皆が納得できる決めたをした	<p>多数決をすぐ行わずに納得のいく討論を経ることも大事 一人ひとりがきちんと納得できるような決めかたも普段の生活の中に活かしていきたい</p>	2 (6.3)

のキャンプ体験によって高められた「主体性」「実行力」「創造力」「発信力」「傾聴力」、あるいは「状況把握力」といった日常生活でも活かせる能力は、その効果が持続しやすいと青木ら¹⁰⁾は述べている。そこで、この実習における、これらの能力の持続的効果に関する検討については、実習前後の自己効力感や個人志向性、社会指向性の変化についての検討と併せて今後の研究課題とした。

さらに、チャレンジプログラムによって、受講者一人ひとりにさらなる意義深い学びが得られるように、プロジェクトアドベンチャー (PA: Project Adventure) の思想を取り入れたアクティビティの開発とその応用について、現在、取り組みを進めているところである。

謝 辞

本研究への参加について快諾いただいた学生諸姉諸君に、深く感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 上西一郎, 別惣淳二, 長澤憲保, 他. (2004). 日頃の自然体験度と自然学校で得た成果の関係. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 4, 55-66.
- 2) 野田淳子. (2008). 青少年の内面的発達に関する冒険教育プログラムの効果について—小学生の集団活動

- と自然体験に注目して— 創大教育研究, 17, 67-78.
- 3) Marcia D. McKenzie.(2000). How are Adventure Education Program Outcomes Achieved?: Are view of the literature. Australian Journal of Outdoor Education. 5(1), 21.
 - 4) 飯田稔. (2000). 教育における自然との関わり合い. 学校体育, 53(8), 6-7.
 - 5) 影山義光, 布目靖則. (2001). 大学キャンプ授業の参加学生の自己概念と孤独感の変化. 野外教育研究, 5(1), 49-59.
 - 6) 遠藤恵子, 松永保子, 遠藤芳子, 他. (1999). 看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報) —基礎看護技術演習における自己効力感の変化と影響する要因—. 山形保健医療研究, 2, 7-13.
 - 7) 吉田充. (2007). キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響. 国学院短期大学紀要, 24, 3-14.
 - 8) 近藤卓. (2010). 自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践. 39. 東京: 金子書房.
 - 9) 経済産業省. (2007). 「社会人基礎力」育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～.
 - 10) 青木康太郎, 粥川道子, 杉岡品子. (2012). キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 3, 27-39.